

福井の幕末明治 歴史秘話

<第28号>

平成29年6月20日発行

新領地を求めた大野藩の挑戦～蝦夷地開拓と大野丸～

白山の支脈に取り囲まれた越前大野。今回は、この地を治めた大野藩が、幕末に藩の命運をかけて取り組んだ蝦夷地開拓と洋式帆船「大野丸」の建造を取り上げます。

江戸時代の終わり頃、大野藩は全国の諸藩同様、莫大な借財に苦しんでおり、藩主、土井利忠は、内山良休と隆佐の兄弟を抜擢し、改革に当たらせました。

兄、良休は主に銅山などの産物や財政を受け持ち、弟、隆佐は大野藩西方領（丹生郡）の代官を務めた後、蝦夷地開拓を任されました。良休は、安政2（1855）年に、藩直営の商店、大坂大野屋を開設。その後、これを全国に広げ、着実に財政再建を進めていきます。一方、隆佐は、安政2（1855）年冬の幕府の蝦夷地開拓奨励を受け、良休らとともに利忠に応募を進言。4万石の大野藩が、新しい領地を得るための新事業に乗り出しました。



内山良休 内山隆佐

安政3（1856）年、隆佐は、30余名からなる探検隊を率いて現地にわたり、調査。開拓の人員・資材、交易品運搬のため、外洋を航行できる洋式帆船が必要との結論に至りました。隆佐は、幕府の許可を得て洋式帆船の建造に着手。安政5（1858）年、竣工し、翌年3月、敦賀・箱館間を初航海しました。

当時、洋式の船の建造は全国的にほとんど例がなく、大藩でもできないことを小藩が成し遂げたと「出群の所置（群を抜いている）」と称されました。名前は、利忠が「大野丸」と命名。製造費用は、蝦夷口掛硯日払帳によれば、7, 239両（現在のお金で約2億円）で、大野屋の売上金から支払われたといひます。

隆佐の蝦夷地開拓の戦略を窺い知れるエピソードが残っています。隆佐は、“今年はともかく来年からは「損失」が出ることはなく、大野屋と大野丸・奥地開拓がうまく噛み合えば、結局「大利」を得る”と見通していました（内山隆佐書状）。安政3（1856）年に箱館大野屋を開設し、翌々年、北蝦夷西海岸の開拓が許可されたことで、交易と開拓の両輪で事業を進めていったのです。開拓の収支はトントンだったと言われていますが、隆佐が見通したとおり、箱館大野屋での交易は、明治6（1873）年までの17年間で約2万両の利潤を上げました。大野丸は、敦賀、大樟、三国の港から、大野産の米・たばこのほか、反物、和紙、漆器などを蝦夷地に運び、地場産業の育成にも貢献しました。

万延元（1860）年、ついに、北蝦夷西海岸が大野藩準領地となります。しかし、その4年後の元治元（1864）年6月、隆佐が病気で亡くなり、8月には、大野丸が根室沖で座礁、沈没しました。人と船を失った大野藩でしたが、開拓はその後も、明治2（1869）年まで継続されました。

日露戦争後から第二次世界大戦までの間、日本の領土だった樺太。大野藩の人々が苦心した足跡は、当時、樺太庁により鶴城（うしよろ）史蹟として指定され、しっかりと樺太に刻まれていたということです。

<参考資料> 『若越山脈』（第二集（内山隆佐）、第六集（内山良休））、福井県史通史編4近世二

～幕末ふくい歴史紀行～ [武家屋敷旧内山家]

・大野藩の財政再建に尽力した内山兄弟。二人の偉業を偲ぶため、後の内山家の屋敷を解体復元し保存した建物です。庭園を眺めながら、お茶が楽しめます。

【住所】大野市城町10-7（JR越前大野駅から徒歩15分）【入館料200円、お茶一席300円】



武家屋敷旧内山家

★お知らせ 松平文庫テーマ展「なまへのヒミツーその1 松平春嶽の場合ー」を開催中！

・平成29年7月12日（水）まで、県立図書館の閲覧室入口で開催。

・福井藩主、松平春嶽の名前に焦点をあて、松平文庫資料から、その変遷や由来、あだ名や号を紹介します！

【住所】福井市下馬町51-11（TEL0776-33-8860）JR福井駅東口からフレンドリーバス県立図書館行乗車